

## 飛騨の暮らしを写真で残す 写真家 木下 好枝

都竹 祥子

行事や風土、豪雪の中で生きる村人の姿が見事に描き出されています。そして木下さんの素敵な文章もさることながら、村人からも心から好かれていたことが良く分かる優れた写真集になりました。

\*

女性写真家 木下好枝さんが逝つて今年で五年になります。飛騨に生まれ育つた彼女は、写真家の細江光洋氏に師事し、飛騨の人々のさりげない生活を撮り続けてきました。



ありし日の木下さん(岐阜新聞提供)

昭和四八年ころから山之村(飛騨市神岡町)を被写体に、厳しい気候や風土に生きる素朴な村人の生活を十年余り撮り続けました。

雪の伊西峠を歩いて越えたり、お堂に野宿したりして撮りまとめた写真が一九九一年、山と渓谷社から写真集『わたしの奥飛騨』として結晶しました。この時、高山市の地場産業センターで写真展も開催され、飛騨の原風景や風習を記録した数多くの作品を大勢の人たちに見てもらうことができました。

写真集中には、今は失われてしまつた飛騨の

木下さんを語る時に欠かせないのは、写真ともう一つはお酒です。煙草を吸い、飲むほどに話が弾み、男性的な考え方と飲みっぷりの良さもあって、よそ者を警戒する村人たちに溶け込むには時間がかかるなかつたようです。結婚式や法事などに合わせて村を訪れる彼女に村人は「昼飯でも食つていかんけな」と声をかけるまでになりました。茶道を通じて出会つた私は、登山や撮影旅行などにかけ、よく抹茶をたてました。冷たい谷水で飲むととても美味しいく、また山の稜線などでコーヒーを沸かし、のんびり登山を楽しんだものです。

こんな時にも彼女はウイスキーや日本酒を忘れませんで

いた。柳田国男、三島由紀夫、アガサ・クリスティー、土門拳などを愛する読書家でもありました。彼女の出版記念旅行の時は、山形県酒田市にある土門拳記念館に行きました。平成四年には第二回須田賞を受賞され、登山仲間と祝賀登山もしました。また、県展の「写真の部」の審査員に女性として初めて選ばれ、県展の発展に尽力されました。

その後、四十年余り撮り続けてきたネガフィルムの整理にかかり、次は高山線沿線の生活風土を撮るとはりきつていたのですが、病魔が彼女を襲いました。このため木下さんが写したたくさんのネガは高山市の郷土館に寄贈されました。

彼女はまた、柳田国男、三島由紀夫、アガサ・クリスティー、土門拳などを愛する読書家でもありました。彼女の出版記念旅行の時は、山形県酒田市にある土門拳記念館に行きました。平成四年には第二回須田賞を受賞され、登山仲間と祝賀登山もしました。

また、県展の「写真の部」の審査員に女性として初めて選ばれ、県展の発展に尽力されました。

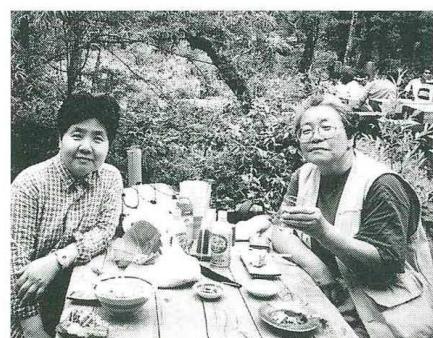
「生きて己を知る友皆師」

彼女は写真集『わたしの奥飛騨』にサインを頼まれるといつも次の言葉を書いていました。

語りたき人は遠くに五月雨  
断ち切れぬ友の思い出露の秋  
都竹祥子



山之村で撮影した「雪の日」(岐阜新聞提供)



上高地にて(筆者左)

今、木下さんの生き様を思ふとき、「ボボロ」という喫茶店が思い出されます。その店主の牧下一己さんは、フルトベングラーが大好きで、画家・歌人・登山家としていろいろな人たちと交流がありました。神岡の鉱山で働いていた牧下さんから教えられた伊西峠のトンネルの向こうにある山之村の話は、彼女にとつてユートピアに思えたのでしょうか。同じ六十五歳で亡くなつた二人は、きっとカメラを首にかけ、好きなお酒を持つて遠く北ノ俣岳を望む伊西峠を「千の風」になつて越えたことでしょう。